
番外編～飼い猫に首輪～

梨栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

番外編「飼い猫に首輪」

【Nコード】

N2914Z

【作者名】

梨栖

【あらすじ】

京から帰って来るのは。美人の上司？ 可愛い部下？ それとも何？

(前書き)

Q..この番外編、何が言いたいの？

A..お酒の力って素晴らしいよね！って事が言いたいんです！

「ふわぁ〜……」

朝、大欠伸をしながら食堂へと歩く李麻。女中から食事を受け取って定位置に座る。

少し遅れて、おはようございますと李麻の左隣に座る山崎。

おはようと、彼の方向をみやったら山崎の表情が目に見えて明るい。

「……どったのザキ。昨日貸したヤツそんなに良かった？」

「はい。やっぱりナース良いですね……って何言わすんですか!!」

「違うの？」

「違いますよ！ 今日ですよ！ 須藤さんが帰って来るの！」

「ああー……道理で土方さんが若干浮かれてるわけだ」

右端のテーブルに座ってマヨネーズをかけた何かを食す土方を見やって言う。

しかし山崎には、何時もと何一つ変わっているようには見えなかった。

そもそも……

「何で副長が浮かれるんですか？」

「……え？」

この後この二人は、食事が終わるまで言葉を発する事はなかった。

『次は大江戸、大江戸……右側、ドアが開きます』

独特なアナウンスの声がそう告げる。ドアが開いて降りた瞬間、ひやりと冷たい風が頬を撫でる。

何ヶ月ぶりかの江戸は、相変わらずの風景で、恋歌を受け入れてくれた。

改札を抜けて、駅を出て、大きく伸びをする。冷たくて、少々汚れた空気が染込むような感覚だった。

「さてと……」

恋歌は小さく呟いてから、その足を屯所の方へと向けた。

出て行った時と何一つ変わらない屯所。その敷居を一步またいだ瞬間、恋歌は何か違和感を感じた。

ズドドドド……という何か大きな塊がこちらに向かって突進してくるような……

そしてその瞬間、玄関がスパンと開け放たれた。

「局……」

「恋歌アアアアアアア！！　おかえりiiiiiiiiiiii！！」

突進してきた何か改め近藤が、恋歌を一目見るや否や両手を広げ
こっちに走ってくる。

「ぎえええええええええ!!」

と、咄嗟に恋歌が避けるものだから、近藤はブレーキが利かず、
向かいの塀にぶち当たった。

そのままずり落ちるように倒れた近藤は、すぐに起き上がり、顔
面血だらけで口をわななかせた。

「そんな本気で嫌がって避けなくても……」

「いや猛スピードでちよつと怖かったただけでして……」

「そりゃ、トシじゃなくて悪かったけどさあ!」

「違えーつつつてんだろが」

折角帰って来たというのに、純粋な歓迎ムードから重たい空気へと早替わりしてしまった。

「あ、そ、そうだ！ 折角帰って来たんだしホラ！ 12月生まれの奴の誕生宴会やろう！」

「あ、え、あ……そそっそうですね！ 帰って来て早々そんな事して頂けるなんて！」

「あ、あったり前だろ！ お前が帰って来る日に合わせて企画したんだからっ！」

「わ、わーい！ やったあ！」

少し気まずい空気を残しながら、二人は屯所へ入っていった。

「尾崎、馬手、出妻、十勝、右京……おめでとう。あと恋歌、おかえり、そして、おめでとおおおお！」

うをおおおおおおお！

もしかすれば御用改めより声高に叫ぶ隊士達が掛け声と共に酒を
かつ食らう。

「おかえりなせえ須藤さん。まあ一杯どうぞ」

「いや、一応未成年だからね。私もお前も」

「誕生日くらい無礼講でさア」

「……貴様の酒癖の悪さにはほとんど愛想が尽きた」

強引にでも猪口に酒を入れたがる、既に出来上がった沖田を迷惑そうに突っ撥ねて席を立つ。

酔っ払いに構っている暇は無い。そのままそろそろと、宴会場を後にした。

「はぁー……」

抜け出せた安堵と、此処へ来てどっと出て来た疲れを溜め息に込めて吐き出す。

恋歌が宴会場を抜け出したのは他でもない。会いたくて止まない人に会いに行くためだ。

その人を探して、縁側をうろついていた最中、恋歌はたと足を止めた。

「……会ったら何と言えば良いのだろうか」

近藤と一緒に屯所に入ってから、土方と顔をあわせていない。

あの日の別れ方が別れ方で、気まずくて気恥ずかしくて、副長室に行く勇気がなかった。

まず一言、ただいまと言うべきなのだろう。しかしその後何を言えばいいのだろうか。

いや。こちらから一方的に話をしていて良いのだろうか。向こうから何か言うまで待つべきなのか。

いや、待っていてどうする。その間メチャクチャ気まづいだろが。

そうだ。京の話をすれば良いんじゃない？ 斉藤さんの話とか……

いや、でもそれが尽きたらどうしよう。うーん……

などと、エンドレスに続きそうな迷いを膨らませていると、縁側の木が軋む音がした。

その音で現実世界に引き戻されて、音のした方を見て、全身が石化するような感覚に陥る。

「あ……」

そこにいたのは、いつぞやと同じ様に、縁側の柱に寄りかかって座っている土方。

また酒でも入っているのか、頬が赤い。

このまま黙って立ち去ろうとしたが、バッチリ目が合ってしまった。
てあえなく断念した。

そして、土方の隣の縁側にストンと腰を落とす。

「……とりあえず、ただいま」

「とりあえず、おかえり」

限りなくぎこちないやりとりを短く済ませて、すぐさま訪れる沈黙。

世界中の恋人のいる乙女達に聞きたい。こんな時一体どうすればいいの？

パニックと、気恥ずかしさと気まずい空気ですぐすばいいのかわからないのだ。

そんな時、目の前に長方形の細めの箱が視界にふっと現れた。

白い箱に、淡い桃色のリボンでラッピングされている箱。

ビククリして土方のほうを見てみれば、思い切り視線を反らした土方の手がそれを握っている。

「何ぞコレ」

「……開けてみ」

きょとんとした顔を見せてから、その箱を受け取って、桃色のリボンを解く。

それから箱を開けば、シルバーの、十字架のネックレス。

シンプルで、それでいて可愛らしい、いかにも女物の小物店で買えそうな代物。

まさか。と恋歌は思う。女物の小物店に入って買った？ この堅物が？

想像して、吹き出しそうになったが、自分のために買ってくれたんだなあと、ふわりと笑う。

「可愛いな！」

「指輪と迷ったけど……それなら仕事中でもそれ以外でも、ずっと身に付けられるだろ？」

「うんっ！」

後ろの金具を外して、十字架の飾りを胸元に合わせてネックレス

を付ける。

早く付けたいと焦っているのか、中々はまらずにじれったそうな表情を浮かべながら付ける。

やっと付け終わったペンダントの、隊服のスカーフの銀色が、月明かりに照らされて少し眩しい。

似合う？ 似合ってる？ と執拗に感想を求める恋歌の笑顔が眩しい。

普段は、元来の不器用な性格のお陰で、彼女が満足するような感想は言ってやれない。

けど……と続ける。

沖田ではないが、誕生日くらい無礼講で……素直に言ってもいいよな？

「……いいんじゃないの？ 似合ってる」

言った瞬間に固まってキョトンとこちらを見る恋歌を見た時、土方はすぐに後悔した。

今のは忘れてくれと言葉を紡ごうとしたが、恋歌の明るくなった表情がそれを遮った。

「ホントに？」

「ホントに」

ますます明るい表情で、ありがとう！　と言われた瞬間、土方の何かの籠が外れてしまった。

考えるよりも先に、自分の両手が恋歌の両頬を、首から上を固定するように包む。

「ふえっ……！？」

指先に伝わる熱で、耳まで赤くなっているのが分かる。

自分の手に重なる一回り小さくて細い手は、抵抗の意ではないことを伝えてくれた。

どちらからともなく、ゆっくりと顔を近づけていく……

「須藤さん！！ 大変です！！ 局長がまた裸踊りを始めちゃまって……」

ドタドタと縁側を駆けながらこちらに近づく山崎の声。

足音が止んだ頃、山崎はあれっ？ と声を出す。

確かに山崎から見れば奇妙な光景だ。

近藤の裸踊りを止めさせるよう、恋歌を呼びに行けば、何故か土方も一緒にいる。

その二人が、異様に空いた距離を保ち、死んだフリをしたようなポーズで横たわっているのだから。

「……お二人とも何してんですか？」

「別に！？　ちょっと、平泳ぎの特訓してて」

「俺はちょっとコンタクト落としただけだからな」

言い訳というにはあまりにも苦しいが、山崎は特に不審がった様子もなくふうんと反応した。

「局長が裸踊りしておるのだな！？　すぐ行くから！！」

「あ、はいっ！　お願いします！」

翌朝、山崎が犬神家ながら、屯所の小池に足だけを出して沈んでいるのが李麻に発見された。

同じ頃恋歌は、月曜日に買いそびれたジャンプを買いまくコンビ
ニにいた。

「くそう！ 話が飛びすぎて分からん。いつの間に新世界へ……！」

「あら、恋ちゃんじゃない！」

聞き慣れた声がしたと思って、振り返ればそこには時雨がいた。

「時雨殿！！」

「お久しぶりね。元気そうでよかったわ」

などと、挨拶をしていると。時雨が、恋歌の首元のネックレスを

見てあら。と眩く。

「どうしたのそれ。首元の」

「プレゼント！」

「そう……」

パツと笑って、自慢げに十字架の飾りを見せてくれる恋ちゃんが可愛かったものだから。

ちょっと豆知識教えちゃったけど、いいわよね？

意地悪？ 貴方が私からこの子を取ったのが悪いのよ。

「ねえ、恋ちゃん。知ってる？」

「え？」

男が女の子にネックレス贈るのはね。独占欲の現われなのよ？

それを聞いた時の、彼女の反応の可愛さといったら。

b
i
r
t
h
d
a
y
t
o
y
o
u.

H
a
p
p
y

(後書き)

恋愛表現上手になりたい梨栖がお送り致しました！まあ、こんな作品さつさとバックブラウザを押して、玖月さんが恋歌の誕生日にとわざわざ書いてくださったコチラのお話を読んで、汚れた目をお清め下さい。00

銀魂のOP「ジレンマ」を玖月さん家の姫華お姉様、操お姉様と一緒に観させて頂きました！

超番外編 ジレンマ：<http://ncode.syosetu.com/n2835z/>

姫華お姉様がカッコイイのはモチロン、玖月さんのお力でこれまたカッコよくなってる時雨さんが一戦交えます！興奮します！

月夜の蝶と蜘蛛：<http://ncode.syosetu.com/n2839z/>

今すぐ飛べ！　そしてお気に入り登録しろい！！（。D。）ゴルフ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2914z/>

番外編～飼い猫に首輪～

2011年12月10日10時49分発行